



# 八鹿青溪



貫徹 慎独 創造

養父市立八鹿青溪中学校 校報  
(令和6年9月25日) 第17号



八鹿青溪中 HP

学校教育目標「ふるさとを愛し 自らを高め 未来への道を切り拓く 八鹿青溪っ子の育成」

## 全国学力・学習状況調査結果④

今号は、教科の調査結果についてお知らせします。今年度の調査は、国語と数学です。



- ◆国語 全体平均正答率：全国・県数値と同程度。  
(+5ポイントの範囲内)

【八鹿青溪中学校の生徒の特徴と今後の展望等】※教員による分析・考察含む

- ・「知識・技能」においては、おおむね好結果であるが、特に「我が国の言語文化に関する事項」が好結果。短歌の表現技法についての問題で好結果。「言葉の特徴や使い方に関する事項」「情報の扱い方に関する事項」は全国・県数値なみ。
- ・「思考・判断・表現」は、全国・県数値なみだが、やや上回る。特に、他者の発言と結び付けて自分の考えをまとめる問題において好結果。また、短歌の内容について、描写を基に捉える問題において好結果。
- ・領域（「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」）に関する傾向としては、いずれの領域もおおむね好結果であるが、特に「読むこと」が好結果。また、一般的には「書くこと」が苦手な中学生が多い傾向にあるが、八鹿青溪中の生徒は全国・県数値なみの6割5分程度正答。自分の考えが伝わる文章になるように工夫しようとしている。いっぽうで無解答率が高いことが大きな課題。文章を要約する問題でも無解答率が高い。
- ・問題形式に関する傾向としては、「選択式」「短答式」「記述式」のいずれもおおむね全国・県数値と同程度。どうしても記述式で数値が下がるのは全国的な特徴。
- ・文章と図を結び付け、その関係を踏まえて内容を解釈することに課題。
- ・漢字を書く出題で「満ち 足りた」を正答した生徒が約7割5分とまずまずの結果である。ひきつづき漢字練習を継続させたい。
- ・時間をかけて丁寧に指導した分野の問題が好結果につながっている。毎日の漢字練習や、表現技法の種類・特徴について繰り返し指導したことが実を結んだと捉えている。また、説明的な文章の学習では段落の役割について1年生時から積み重ねているので、比較的取り組みやすい問いであったと思われる。
- ・引き続き漢字練習を継続的に取り組むとともに、単なる言葉や文章の理解だけではなく、筆者の意図を探るような深い学びが必要だと考える。そのためには、主体的に学びを深められるような授業づくりがより一層大切になってくる。また、自分自身が書いた文章を校正したり相互に点検したりするような学習も必要である。

## ◆数学 全体平均正答率:全国・県数値と同程度。(＋5ポイントの範囲内)

【八鹿青溪中学校の生徒の特徴と今後の展望等】※教員による考察・分析含む

- ・「知識・技能」は好結果。正方形の回転移動についての問題や正の数と負の数の計算問題において好結果。また、複数の集団のデータの分布から四分位範囲を比較する問題やグラフの問題などで好結果。いっぽう、与えられたデータから最頻値を求める問題や図形の性質を見い出す問題が課題。
- ・「思考・判断・表現」は全国・県数値なみであるがやや下回る。数学的な表現を用いて説明する問題では好結果。目的に応じて式を変形したり、その意味を読み取ったりして、事柄が成り立つ理由を説明する問題で課題あり。無解答率も高い。
- ・領域(「数と式」、「図形」、「関数」「データの活用」)に関する傾向としては、全領域において全国・県数値なみ。その中でも「関数」「データの活用」の問題においては好結果。
- ・問題形式に関する傾向としては、「選択式」が好結果だが、「短答式」「記述式」はともに全国・県数値なみ。ただし、「記述式」は全国的、全県的に課題であり、本校はその数値をさらに下回ることが大きな課題。
- ・図形の証明問題の正答率が極めて低いことが大きな課題である。
- ・無解答率が高い問題が目立ち、粘り強く最後まで解答する力を養いたいところである。
- ・基礎計算には定着が見られるが、証明のような応用問題に課題が見られる。家庭学習では基礎計算が中心になっているが、時には応用問題も取り入れることも検討していく必要があると考える。また、課して返すだけの宿題ではなく、授業で再考させることも有意義なのではないかと考える。
- ・授業では、基礎基本の定着とともに、発展的、課題探求的な学習も取り入れる必要があると考える。授業時数も念頭に置きながら、より計画的に教育課程を進めたい。

## ◆総括

同時に行われた国語に関する生徒質問紙調査では、9割以上の生徒が「国語の勉強は大切だと思う」と回答しています。また、同じく9割以上の生徒が「国語の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思う」と回答しています。いっぽう、「国語の勉強は好きですか」の問いでは、「好き」が5割程度に下がってしまいます。

おなじく、数学に関する生徒質問紙調査では、8割近くの生徒が「数学の勉強は大切だと思う」と回答しています。また、同じく8割近くの生徒が「数学の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思う」と回答しています。いっぽう、「数学の勉強は好きですか」の問いでは、「好き」が3割5分程度に下がってしまいます。「勉強が大切であるのは分かるが、やはり勉強は嫌いだ」という感情は昔も今も変わらないということなのでしょう。生徒の気持ちは私もよく分かります。(笑)

いっぽう、生徒の生活状況と学力との関係についてですが、スマートフォンなどでSNSや動画視聴を行う時間が長いほど、正答率が低くなる傾向が見られたとのことです。具体的には、中学国語で、1日あたりのSNSや動画視聴などが「30分未満」と答えた生徒の正答率は63.9%であったのに対し、「4時間以上」と答えた生徒は51.6%に下がり、12.3%もの差が開いています。校報第6号(令和6年5月20日付け)でもお伝えしたように、学校としては、中学生のSNS利用に関する指導は随時行っていますが、そもそもSNSを所持させておられるのはそれぞれのご家庭ですから、その結果についての最も大きな責任を有するのは保護者の皆様であることをご認識ください。

※全国学力・学習状況調査は、教育活動及び学力の一側面を調査した結果にすぎず、今回の結果が児童生徒の実態、学校教育、家庭教育のすべてを評価しているものではないということを申し添えます。